

大阪府埋蔵文化財調査報告書2008-3

呉竹遺跡

—布施警察署庁舎建設に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

呉 竹 遺 跡

—布施警察署庁舎建設に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

序 文

呉竹遺跡は、大阪府警本部布施警察署建設設計画に伴って、平成18年度に実施した試掘調査で新たに発見された遺跡です。

試掘調査では古墳時代の遺物が出土しており、本調査の実施にあたっては、同時期の遺構の検出を予想していましたが、発掘調査の結果、古墳時代に加えて奈良時代の遺構面も存在することが確認され、それぞれ多くの遺構や遺物を検出することができました。

なかでも古墳時代の遺構面では、総柱の倉庫が2棟並んだ状態で検出され、その周辺には集落を区画する溝や、遺物が多数出土した土坑などもみられるなど、当地周辺に集落が存在していたことが判明しました。

また、今まで周辺で奈良時代の遺物を伴う遺構は見つかっておらず、ここで同時期の遺構の存在を確認できたことは、中河内地域の古代史研究の一助となる資料を得たと考えます。

今回の調査では、呉竹遺跡の一端に足を踏み入れたにすぎませんが、今後の周辺の調査によって、多くの知見が得られ、古墳時代や奈良時代の集落の規模や性格など詳細が解明されるものと確信しております。

最後になりましたが、調査に際しまして地元住民の方々および関係各位に、多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成21年3月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長 富尾 昌秀

例　　言

1. 本書は、大阪府警察本部布施警察署庁舎建設に先立って大阪府教育委員会が実施した、東大阪市下小阪に所在する呉竹遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府警察本部の依頼を受けた大阪府教育委員会が、文化財保護課調査第一グループ総括主査岩崎二郎、主査岡本敏行、技師岩瀬　透の担当で、平成18年度に技師小川裕見子が担当して実施した試掘調査の結果をふまえ、庁舎建設予定地の全域を対象として、平成19年度に5月28日～12月10までの期間を費やして実施した。遺物整理作業は文化財保護課調査管理グループ主査三宅正浩、技師藤田道子が担当して実施した。
3. 調査に要した経費は、全額を大阪府警察本部が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、地元周辺の各自治会をはじめ大阪府警察本部、大阪府東部水道事業所など、多くの方々のご協力を得た。
5. 写真測量は株式会社南紀航測センターに委託して実施した。撮影フィルムは同社が保管している。
6. 本書に掲載した現場写真は岩瀬が撮影したが、遺物写真の撮影は有限会社阿南写真工房に委託した。
7. 本調査の調査番号は07018である。
8. 本書の執筆は岩瀬・小川・藤井信之が行い、編集は岩瀬・藤井が行った
9. 本書は300部作成し、一部あたりの単価は616円である。

凡　例

1. 本書で用いた座標値は世界測地系座標値である。
2. 図中の方位は座標北を示し、標高については東京湾平均海水面（T. P.）を基準とする数値である。
3. 本書に記載した遺構は検出順に遺構番号を付し、その表記方法は、遺構の種類（土坑、溝など）、次に三桁の遺構番号の順に記載している（例：土坑 001、溝 100 など）。但し、掘立柱建物のように複数の遺構の集合体である遺構については、1 から順に番号を付して表記している（例：掘立柱建物跡 1 など）。
4. 本書に記載した遺物については、すべての遺物に一連の通し番号を付しており、挿図および図版の遺物番号はすべて本文中の番号と一致する。
5. 本書における出土遺物の実測図は、4 分の 1 縮尺で掲載している。

目 次

序 文

例 言

凡 例

第1章 調査の経過・ (岩瀬) 1

 第1節 調査に至る経過

 第2節 調査の方法

第2章 位置と環境・ (藤井) 2

第3章 調査の成果・ (岩瀬・小川・藤井) 6

 第1節 層序

 第2節 遺構と遺物

 第1項 古墳時代後期～飛鳥時代の遺構

 第2項 奈良時代～平安時代の遺構

 第3項 遺構出土遺物

 1 第2面検出の遺構出土遺物

 2 第1面検出の遺構出土遺物

 3 出土馬齒

第4章 総括・ (岩瀬) 26

挿 図 目 次

第1図	呉竹遺跡の位置	1
第2図	調査区位置図	2
第3図	呉竹遺跡周辺の遺跡分布図	4
第4図	調査区南壁柱状図	5
第5図	古墳時代後期～飛鳥時代遺構全体図	7～8
第6図	掘立柱建物跡1平・断面図	9
第7図	掘立柱建物跡2平・断面図	10
第8図	溝78・溝127平・断面図	11
第9図	溝126・溝177平・断面図	12
第10図	土坑185平・断面図	12
第11図	奈良時代～平安時代遺構全体図	13～14
第12図	土坑111平・断面図	15
第13図	溝16平・断面図	16
第14図	土坑114遺物出土状況平・立面図	17
第15図	溝46-1・溝46-2平・断面図	17
第16図	溝51平・断面図	17
第17図	出土馬歯	23
第18図	出土遺物実測図	24
第19図	遺構の変遷	26

表 目 次

表1	掘立柱建物跡1柱穴計測表	9
表2	掘立柱建物跡2柱穴計測表	10
表3	出土遺物観察表	25

図 版 目 次

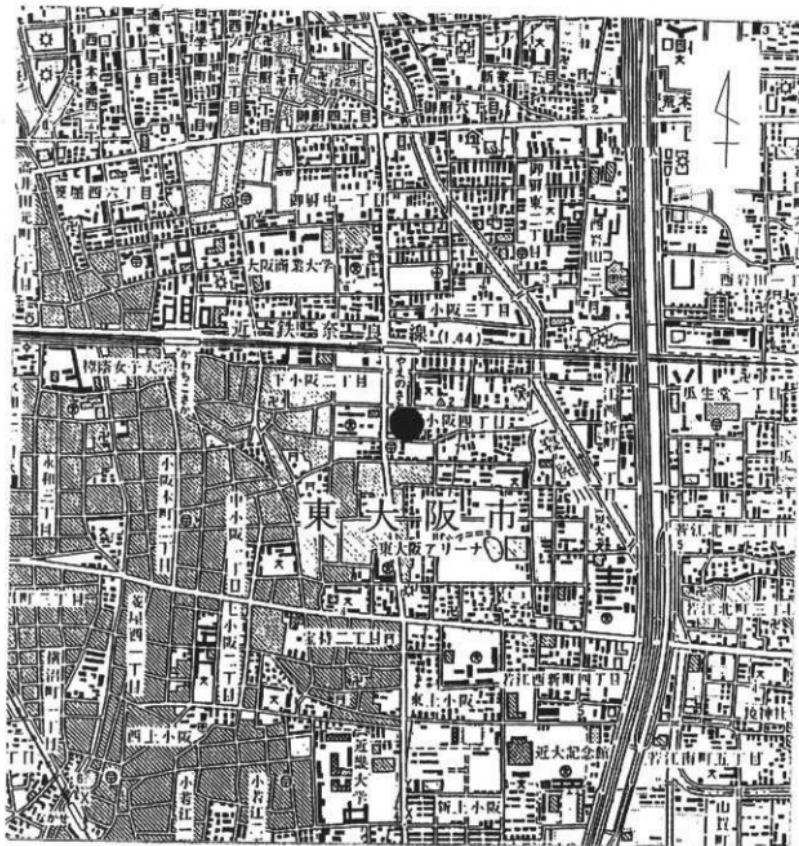
- | | | | |
|-----|---|-----|---|
| 図版1 | 掘立柱建物跡1全景（北より）
柱穴87（北東より）
柱穴95（北西より）
柱穴96（東より）
柱穴96礎板出土状況（北より） | 図版4 | 第2区第1面全景（北より）
第1区第1面全景（北より）
土坑11（南より）
土坑11遺物出土状況（西より）
溝16（南より）
土坑56遺物出土状況（東より） |
| 図版2 | 掘立柱建物跡2全景（北より）
柱穴138（南東より）
柱穴166（北東より）
柱穴141（北西より）
柱穴167（北西より） | 図版5 | 土坑77（南より）
溝46（南より）
溝51（南より） |
| 図版3 | 第2区第2面全景（北より）
溝78、127（北より）
溝126、177（北より）
溝78、127（南西より）
溝126、177南半（南東より）
土坑185（南より）
土坑185断面（南より） | 図版6 | 土坑11出土遺物 |
| | | 図版7 | 溝16、土坑114出土遺物
溝46、溝51出土遺物 |

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

平成18年度に大阪府警察本部によって、布施警察署庁舎を東大阪市下小阪地内の旧布施ポンプ場跡地に移転する計画が成されたが、当該地が遺跡の周辺地にあたるため、建設工事に先立って大阪府教育委員会が遺跡の有無を確認するため試掘調査を実施した。その際遺構および遺物が検出されたため、新規発見の遺跡として周知され、以後「呉竹遺跡」と呼称されることとなった。

試掘調査の結果を踏まえ、平成19年度に庁舎建設予定範囲の全域約1,487m²を対象として、発掘調査を実施することになった。



第1図 呉竹遺跡の位置

第2節 調査の方法

調査に際しては、世界測地系国土地標値を基準として5m四方の区画を設定した。この区画はアルファベット小文字(a~i)とアラビア数字(0~9)で表現し、区画を表す場合は縦方向を優先している。また、遺物取り上げの際の地区名はこの区画名を記入しているが、標記の際は北西端の地区名が付される。

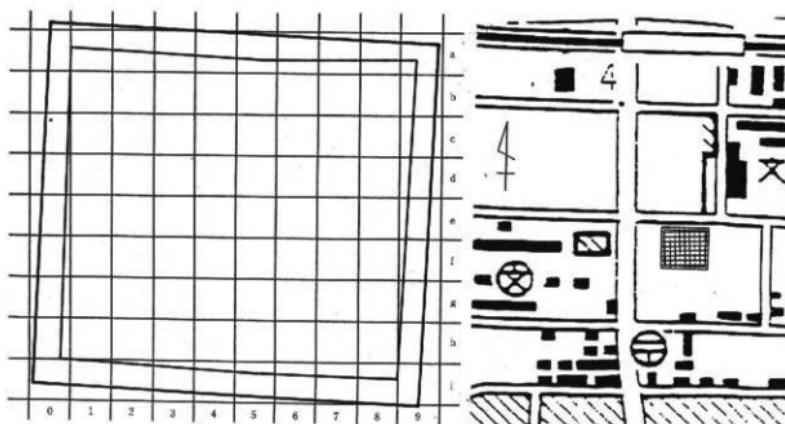
検出した遺構には検出順に通し番号を付している。但し、掘立柱建物のように複数の遺構の組み合わせで形成される遺構の場合は、個々の遺構に付した通し番号とは別に、掘立柱建物跡1などと表現した。そして各柱穴には固有の通し番号が付されており、必要に応じて両者を併記することになった。

掘削に際しては、旧布施ポンプ場解体後の整地土をバックホウで機械掘削し、その下層については1層ずつ人力で掘削したうえで、精査・遺構検出・遺構掘削を行った。

検出した遺構面の実測については、第1面の遺構全体図については写真測量を実施し、その他の面の遺構全体図、個々の遺構および遺物出土状況等の実測については、必要に応じて5m四方に設定した地区杭を基準にして実測図を作成した。また、調査区および各遺構の断面図は、東京湾平均海面(TP)を基準として作成した。

第2章 位置と環境

呉竹遺跡は今回新たに周知された遺跡で、東方は生駒山の麓まで、西方は上町台地まで広がる河内平野のほぼ中央に位置している。河内平野を横断する近鉄奈良線八戸ノ里駅の南約200mの、東大阪市下小阪に所在する。周辺には北東方に意岐部遺跡（遺跡地図番号4、以下同じ）西岩田



第2図 調査区位置図

遺跡（5）東方には瓜生堂遺跡（8）南方には上小阪遺跡（13）が所在し、各遺跡に於いて縄文時代より近代に至るまで、各時代の遺構が連続と続くことから、古くから栄えた地域であったことが窺える。また、周辺には「河内街道」や「十三街道」など主要な街道が通り、古来より人の往来があったことも窺える。現代においても近鉄奈良線や近畿自動車道、大阪中央環状線が通り、中小企業や商業施設、一般住宅などの開発が進んでいる地域である。

本遺跡が位置する河内平野は、時代ごとに様々に環境を変化させてきた。縄文時代早期には気候の温暖化がおこり、前期にはいわゆる縄文海進により海岸線が内陸に進出し、東は生駒山麓付近、北は阪急京都線付近、南はJR関西本線を南に1km程超えたあたりを汀線とする「河内湾」が形成されていた。この頃当遺跡は海の中であり人間活動の痕跡は認められない。

約5000年～4000年前になると、河内湾はその規模をやや縮小する。上町台地縁辺部や生駒山麓の扇状地に縄文時代前期の遺跡（恩地、縄手、国府、船橋、森之宮など）が確認されている。

約3000年～2000年前には、淀川や旧大和川などによってもたらされる土砂により、河内湾は更に規模が縮小され、海水と淡水が混ざり合う汽水域の「河内潟」となる。その汀線付近に弥生時代前期の集落（山賀（16）、瓜生堂（8）、高井田など）が営まれるようになる。

この頃から河内潟は次第に淡水化していく。長柄砂州がしだいに発達していき、河内潟の入り口を塞ぎ、その結果海水が流入しなくなり、「河内潟」は「河内湖」へと変化する。また、淀川や旧大和川とその周辺の河川がもたらす土砂により水域もかなり狭くなり、低湿地が広がるようになる。河川の氾濫も頻繁に起こるようになり、その時にできた自然堤防の上に人が住み始めるようになる。そしてその自然堤防沿いに形成される一段低い後背湿地帯に水田を営むようになる。

弥生時代後期になると一旦水位が上昇し、河川の氾濫が頻繁に起こるようになる。低地には水が入り込み、そのためこの付近は沼沢地化が進み、集落の放棄、移動が行なわれたようである。

古墳時代前期に入ると、前時代の洪水の影響で集落の再構成が行なわれた。洪水によって新たに形成された微高地に居住域が広がり、やや低くなった土地に水田を営んだ跡が多く検出される。この付近では西岩田遺跡（5）新上小阪遺跡（15）瓜生堂遺跡（8）若江北遺跡（10）などで古墳時代前期の遺跡が確認されている。

古墳時代中期の遺跡はあまり多く認められない。中期後半に新家遺跡（3）西岩田遺跡（5）意岐部遺跡（4）などに集落が確認される程度である。

古墳時代後期になると、少し離れるが友井東遺跡（20）などにも集落が確認される。呉竹遺跡でも古墳時代後期～飛鳥時代の掘立柱建物跡などを検出した。

古代には、呉竹遺跡の南方約2.5kmのあたりにある美園遺跡（21）で、7世紀の水田畦畔が検出されている。大阪平野における条里制の施行はこの時期に始まると思われる。瓜生堂遺跡（8）では少ないながらも掘立柱建物、土坑、溝などが検出されており、「若」と記された墨書き土器も出土している。この周辺はこの頃から交通の要衝であった為、寺院や郡衙が建設されたと思われ、この周辺には若江郡の郡衙があったと推定されている。

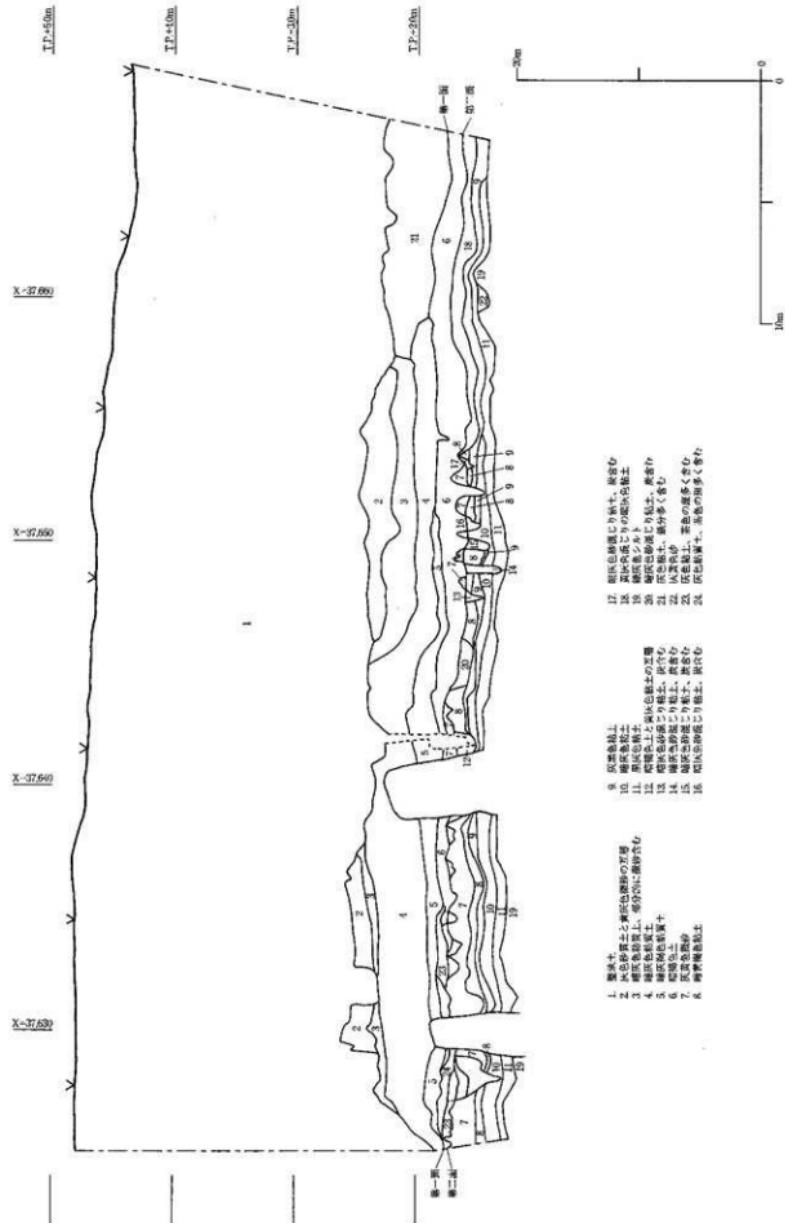
平安時代に入ると、この付近は皇室や寺社の魚介類を調達する御厨に定められた。950年（延喜5年）、この付近の湖沼一帯を「大江御厨」と定めたのが始まりと言われている。現在に残る御厨という地名の起源とされる。

中世になり巨摩遺跡付近に巨摩磨寺（9）が建てられた。また若江遺跡（11）では鎌倉時代の瓦器や輸入陶磁器などが多量に出土している。室町時代になると若江城が築城される。若江城は織田信長の石山本願寺攻撃の拠点となった城である。安土桃山時代に入ると、水田と並行して水



- 1 吳竹遺跡 2 西堤遺跡 3 新家遺跡 4 意岐部遺跡 5 西岩田遺跡 6 中ノ町遺跡 7 岩田遺跡
8 瓜生堂遺跡 9 巨摩磨寺遺跡 10 若江北遺跡 11 若江遺跡 12 横沼遺跡 13 上小阪遺跡
14 小若江遺跡 15 新上小阪遺跡 16 山賀遺跡 17 西郡堺寺遺跡 18 衣摺遺跡 19 弥刀遺跡
20 友井東遺跡 21 美園遺跡 22 葦振遺跡 23 葦振1号墳 24 菱江寺跡

第3図 吳竹遺跡周辺の遺跡分布図



第4図 調査区南壁柱状図

田を開墾する際に出土した土砂や河川の氾濫によって運ばれてきた砂を島状に盛って、畠を作りその上で河内木綿の栽培が盛んに行なわれるようになる。このような畠を島畠と呼び、現在でも水田の一角に見受けられることがある。このように河内平野は全国でも唯一の綿花生産地となつたが、大阪冬の陣、夏の陣でこのあたりは主戦場になり、一面焼け野原となってしまうようである。

1704年（宝永元年）、それまでたびたび氾濫をおこしていた大和川の付け替えが行なわれ、洪水の被害は激減した。しかしその影響で平野川、長瀬川が枯渇してしまい、その周辺の田畠は水不足に悩まされるようになる。また、新大和川は西徐川、東徐川を分断した為、新しい川筋の両側は排水不良となり、周辺に位置する村々は浸水に悩まされるようになる。

参考文献

- 2003 (財) 大阪府文化財センター 「新上小坂遺跡」 1986 梶山 彦太郎／市原 実 「大阪平野のおいたち」
1981 瓜生堂遺跡調査会 「瓜生堂遺跡Ⅲ」 1983 大阪府教育委員会／(財) 大阪府文化財センター 「西岩丘」
1983 大阪府教育委員会／(財) 大阪府文化財センター 「山賀 (その3)」

第3章 調査の成果

第1節 層序

調査区は地表面（T.P.+4.1m～4.8m）より最終遺構面（T.P.+1.2m付近）までの、3.6mの深度を調査対象として掘削し、計3面の遺構面を検出した。

調査によって確認した最も前出の遺構面は、第19層緑灰色シルト上面（T.P.+1.3m～1.6m）で検出した第3面で、遺構・遺物は出土しなかつたが、調査区全域で直上に堆積する第10層暗灰色粘土ないしはシルトから古式土器が出土しており、第3面は古墳時代前期ないしはそれ以前に相当する面と考えられる。

第11層上には第10層暗灰色粘土、第8層暗黄褐色粘土が堆積している。調査区の東端部付近を除いては第8層上面及び第18層が第2面となり、古墳時代後期～飛鳥時代の遺構が検出された。東端部付近は第8層の直上に第7層灰黄色微砂の堆積がみられ、第7層上面が第2面となる。T.P.+1.6m～1.7mにあたる。

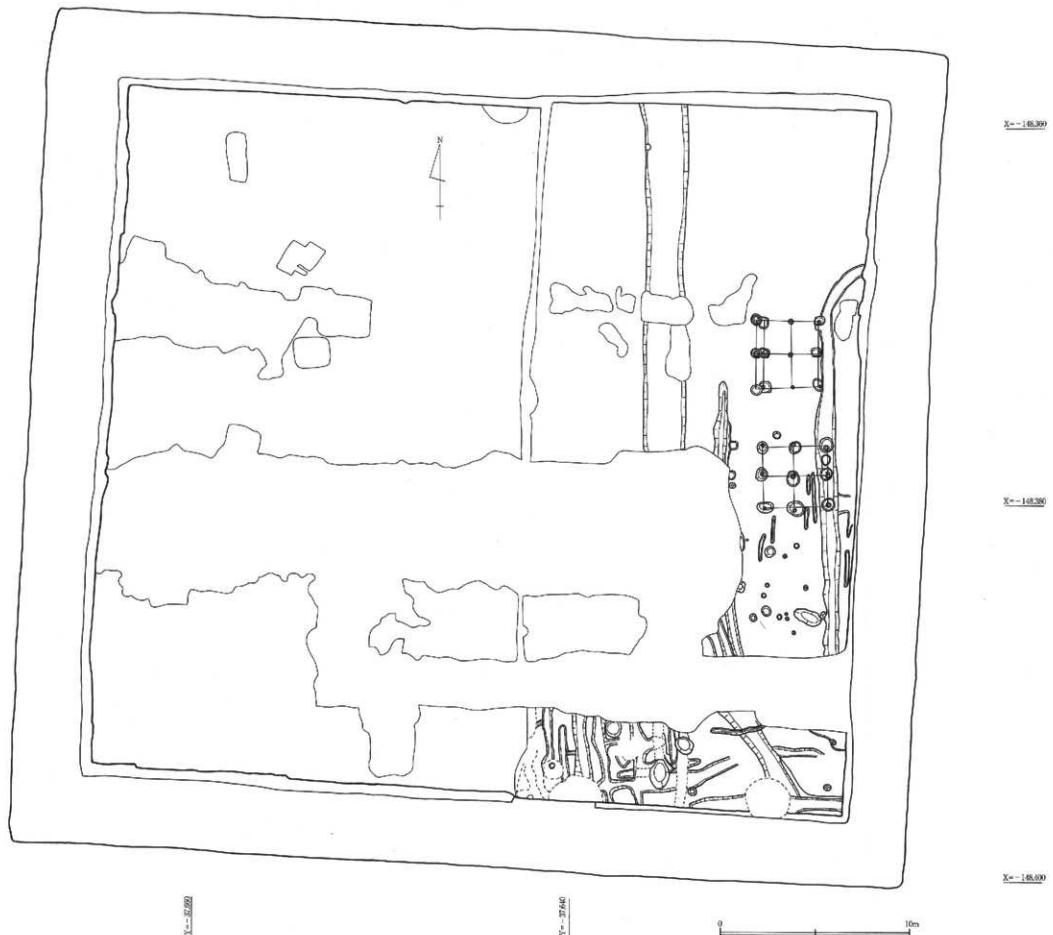
第7層上には第6層暗褐色土が堆積しており、これは古墳時代後期～飛鳥時代の遺物包含層である。

第6層上面が第1面で、奈良時代の遺構が検出された。T.P.+1.8m付近にあたる。

第6層上には第5層暗灰褐色粘質土および第4層暗灰色粘質土が堆積しており、これは奈良時代の遺物包含層である。

第4層の上には中・近世の耕作土がみられるが、これらは旧布施ポンプ場建設に際して削平を受けており、ごく一部に浅く残存するのみであったことが確認された。

調査区全域にポンプ場解体後の整地土が2m～3m程堆積し、地表面を形成している。

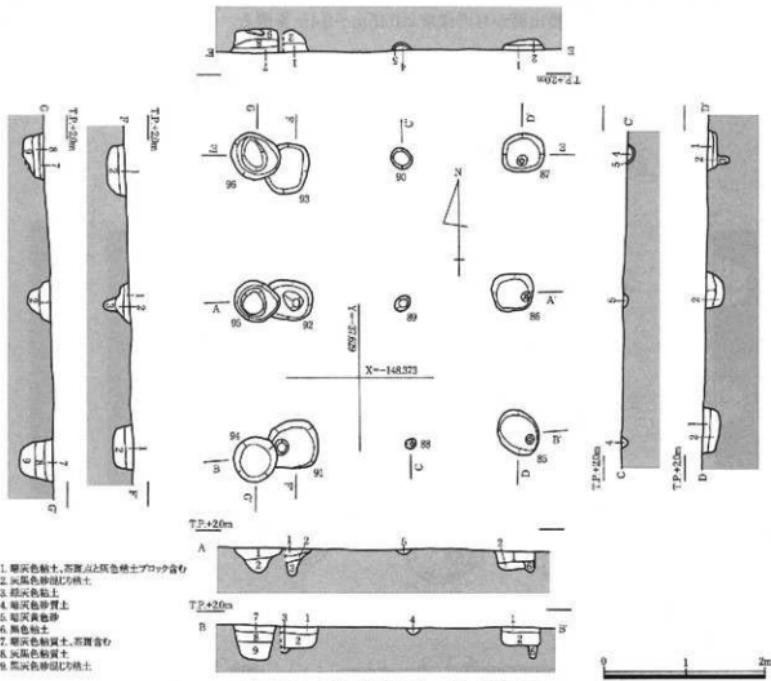


第5図 古墳時代後期～飛鳥時代遺構全体図

第2節 遺構と遺物

第1項 古墳時代～飛鳥時代の遺構

本遺跡は旧布施ポンプ場の建設による搅乱によって大きく削平を受けているため、中央部には遺構が残っていない。更に、古墳時代から飛鳥時代の遺構はその殆どが調査区の東半部より検出されている。また、2棟検出された掘立柱建物は、区画溝と思われる溝126及び溝177の東側で検出されている。



第6図 堀立柱建物跡1平・断面図

ピット No.	測線番	形	基盤 (m) 幅 (奥幅 × 従幅)		深度 (m)	柱根・礎板 有無	出土遺物	備考
			幅	深さ				
85	1番	円形	0.60 × 0.50		0.38			
86	1番	方形	0.50 × 0.50		0.25			
87	1番	隅丸方形	0.55 × 0.50		0.27			
88	1番	円形	Φ 0.15		0.08			
89	1番	円形	Φ 0.20		0.06			
90	1番	円形	Φ 0.25		0.09			
91	1番	方形	0.60 × 0.60 (残存壁)		0.27			
92	1番	隅丸方形	0.50 × 0.40 (残存壁)		0.33			
93	1番	隅丸方形	0.60 × 0.30 (残存壁)		0.26			
94	1番	円形	Φ 0.55		0.43			
95	1番	円形	0.60 × 0.55		0.30			
96	1番	円形	0.60 × 0.55		0.29	有(變板)	須恵器	

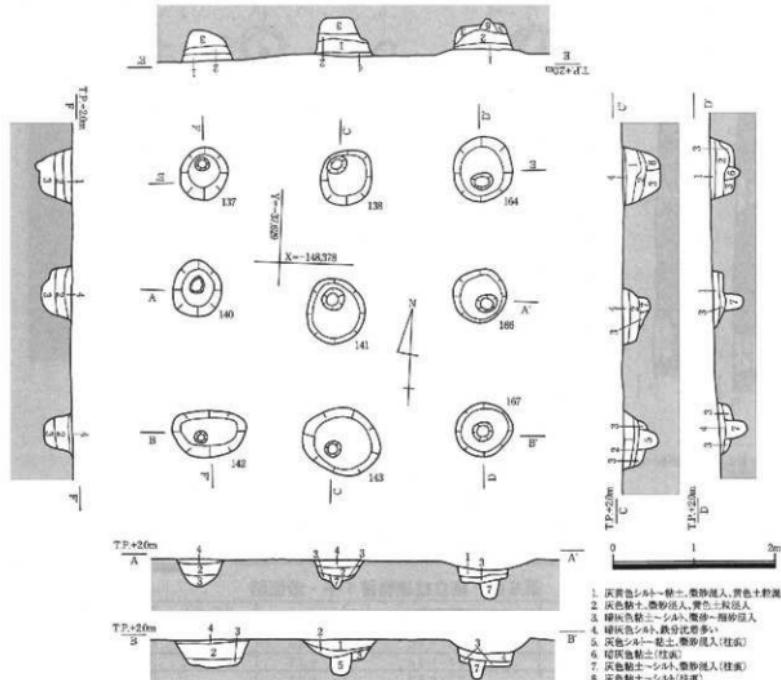
表1 堀立柱建物跡1柱穴計測表

出されている。このことから、居住域は調査区の東側に広がっていくものと思われる。

検出した遺構は掘立柱建物2棟、土坑2基、溝9条、ピット1ヶ所である。

掘立柱建物跡1(第6図、図版1)

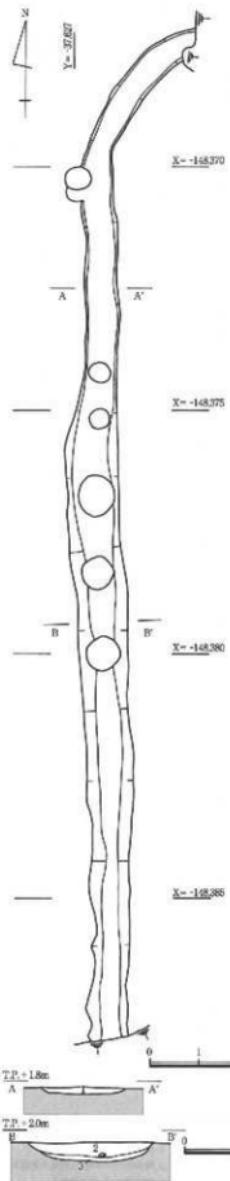
調査区東端の中央やや北部の、X = -148,373、Y = -37,629付近で検出した。建物の主軸はほぼ南北方向を指す。梁間2間×桁行間2間のやや南北に長い掘立柱建物である。8ヶ所の棟持柱に加えて1ヶ所の東柱を持つ、総柱の掘立柱建物である。梁間3.4m、桁行間4.3mを測った。9ヶ所所検出した柱穴のうち中央列の3ヶ所を除く6ヶ所は、直径0.45m~0.6m程度の不整円形状ないしは隅丸方形を呈し、検出面からの深度は0.15m~0.4mを測る。いくつかの柱穴内に柱痕が認められた。北西コーナー部の柱穴96からは礎板が検出された。この礎板は木製容器を転用しているものと判明した。



第7図 堀立柱建物跡2平・断面図

ピット No.	遺構番	形	規格(m) 往(基盤×最幅)	深度(m)	柱痕・礎板 有無	出土物	備考
137	2番	円形	0.66 × 0.58	0.39			
138	2番	隅丸形	0.68 × 0.62	0.48	有(礎石?)	頭骨	
140	2番	やや複円形	0.68 × 0.58	0.37			
141	2番	円形	0.80 × 0.70	0.35			
142	2番	長圓形	0.90 × 0.58	0.40			
143	2番	橢円形	0.94 × 0.80	0.46			
164	2番	円形	0.80 × 0.74	0.32			
166	2番	円形	0.68	0.39	有(礎石?)	土器部	
167	2番	円形	0.67	0.39		黑色土器	

表2 堀立柱建物跡2柱穴計測表



西側桁行の柱穴はすべて切り合った状態で検出された。切っているほうの柱穴もほぼ南北方向を指していることから、掘立柱建物1は梁間が西側に約0.4m拡張されたと考えられる。

また、南北中央棟持柱及び中央束柱は、直径0.15m～0.25mの不整円形状又は不整楕円形状の掘方を呈し、深さは0.05m～0.15mと他と比べて小規模である。この3ヶ所の柱穴には柱根及びその痕跡は認められなかった。

いくつかの柱穴の埋土内から須恵器の破片が出土した。出土した須恵器から、掘立柱建物跡1はTK43型式の段階に比定できるものと考える。

掘立柱建物跡2（第7図、図版2）

調査区東端の中央部の、 $X = -148,378$ 、 $Y = -37,629$ 付近で検出した。掘立柱建物跡1の南側で検出した。建物の主軸はほぼ東西方向を指す。梁間2間×桁行間2間の東西に長い掘立柱建物である。8ヶ所の棟持柱に加えて1ヶ所の束柱を持つ、総柱の掘立柱建物である。梁間4.0m、桁行間4.1mを測った。9ヵ所検出した柱穴は、直径0.6m～0.8m程度の不整円形状又は不整楕円形状を呈し、検出面からの深度は0.35m～0.5mを測る。すべての柱穴内に柱根が認められた。

いくつかの柱穴の埋土から須恵器の破片が出土した。出土した須恵器から、掘立柱建物跡2はTK43型式の段階に比定できるものと考える。また、建物の方向や位置関係からみて、掘立柱建物1と掘立柱建物2は同時期に並存していたものと考えられる。

溝78・溝127（第8図、図版3）

溝78は調査区の東端中央部の、 $X = -148,367 \sim -148,375$ 、 $Y = -37,625 \sim -37,627$ 付近で検出し、溝127は調査区の東端中央部やや南、 $X = -148,375 \sim -148,388$ 、 $Y = -37,627$ で検出した。この2条の溝は当初々に検出したが、検出状況や出土遺物などから同一の溝と考えられる。調査区を南北に走る溝であるが、北端は東に弧を描きそのまま調査区東壁外に伸びていく。南端は搅乱によって削平を受ける。検出幅最大1.1m、最小0.7m、検出面からの深度は0.15mを測る。埋土は2層に分かれており、上層は暗灰色シルト～微砂（鉄分斑、黄色砂斑少量混入）、下層は明灰色粘土（上層がブロック状に少量混入）がそれぞれ堆

第8図 溝78・溝127 平・断面図

1. 黒褐色灰土
2. 黒褐色シルト～微砂、鉄分斑上層に少量、黄色砂斑少量混入
3. 明灰色粘土に2がブロック状に混入

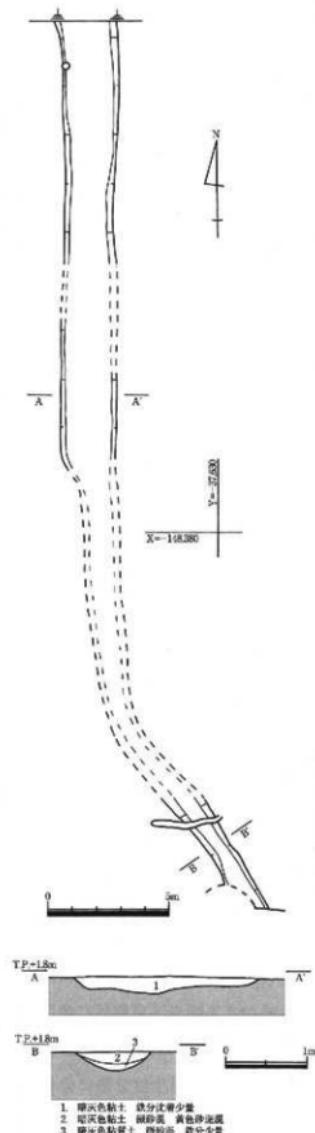
積する。埋土から土師器、須恵器が出土した。

溝126・溝177（第9図、図版3）

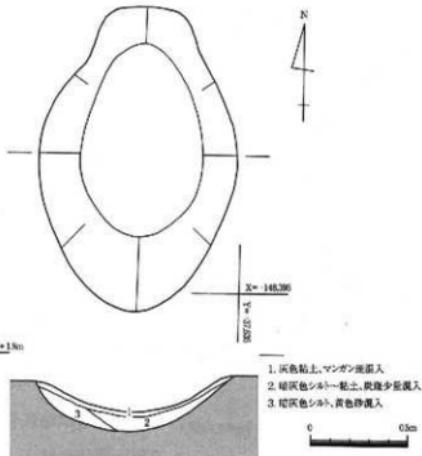
溝126は調査区の中央部北半の、 $X = -148,359 \sim -148,377$ 、 $Y = -37,635$ 付近で検出し、溝177は調査区の南東隅の、 $X = -148,391 \sim -148,396$ 、 $Y = -37,628 \sim -37,632$ 付近で検出した。溝177の南端は調査区南壁外に伸びてゆき、北端は擾乱によって削平を受けているが、擾乱のさらに北側で溝126を検出しており、出土遺物から、ともに古墳時代後期のものと思われるため、これらの溝は同一の溝と思われる。溝126の北端は調査区北壁外に伸びていく。この2つの溝より東側から古墳時代後期の主要な遺構（掘立柱建物など）が検出されていることから、溝126、溝177は古墳時代後期の居住区の西端を画する区画溝と思われる。検出幅最大2.6m、最小0.9m、検出面からの深度は0.23mを測る。埋土は2層に分かれており、上層は暗灰色粘質土（微砂、黄色砂斑混入）下層は暗灰色粘質土（微砂、鉄分少量混入）がそれぞれ堆積する。埋土から土師器、須恵器が出土した。

土坑185（第10図、図版3）

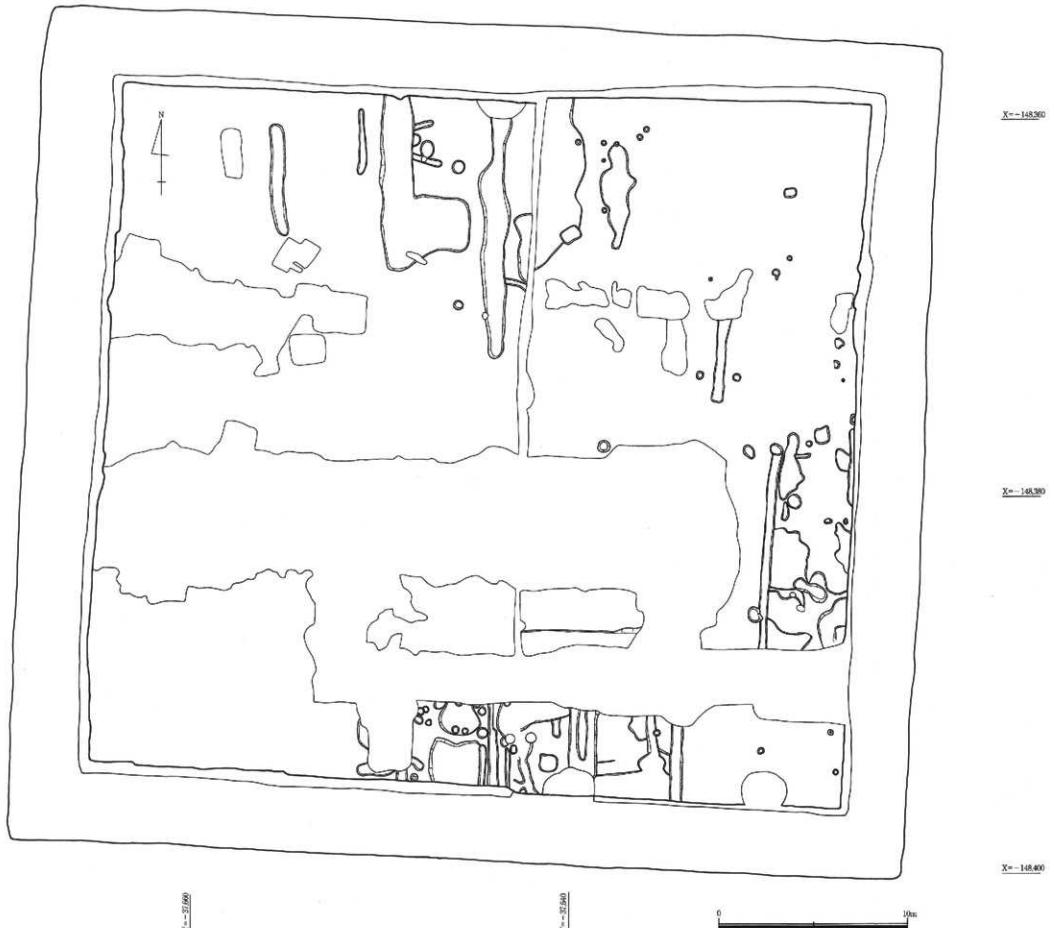
調査区中央部南端の、 $X = -148,395$ 、 $Y = -37,635$



第9図 溝126・溝177 平・断面図



第10図 土坑185 平・断面図



第11図 奈良時代～平安時代造構全体図

付近で検出した。長軸1.6m短軸1.0mの不整橢円形状を呈し、深度は検出面より0.26mを測る。上半部を奈良時代の溝109によって削平を受けている。埋土は3層に分かれており、上層は灰色粘土（マンガン斑混入）、中層は暗灰色シルト～粘土（炭斑少量混入）、下層は暗灰色シルト（黄色砂混入）がそれぞれ堆積する。埋土から須恵器が出土した。

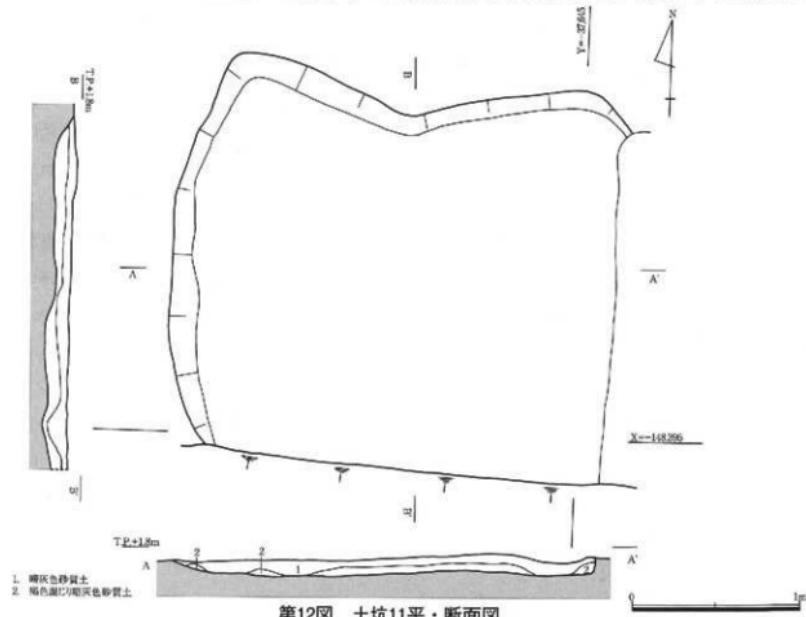
第2項 奈良時代～平安時代の遺構

第1項でも述べたように、調査区は大規模な削平を受けているため、中央部には遺構が残っていないが、残存している部分からは奈良時代～飛鳥時代の遺構が検出されている。したがって、ある程度の遺構密度の濃淡はあるものの、調査区全域に遺構が広がると思われる。検出した遺構は土坑16基、溝7条、ピット10ヶ所である。須恵器の杯蓋や高台を付す杯身、瓶子など、土師器の壺や甕の破片などが出土している。

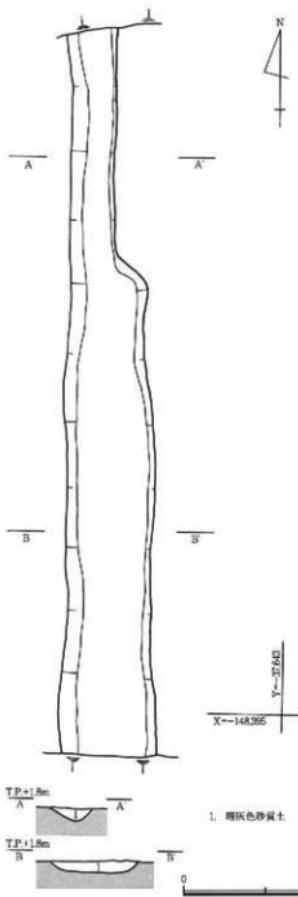
土坑11（第12図、図版4）

調査区の中央部南端部の、 $X = -148.395$ 、 $Y = -37.646$ 付近で検出した。平面形は不整長方形状を呈しており、南北2.6m、東西2.8mを測り、深度は0.15mを測る。遺構の東側を溝22に切られており、南側は調査区外に伸びてゆく。

埋土は2層に分かれており、上層は暗灰色砂質土、下層は褐色混じり暗灰色砂質土が堆積する。埋土から瓦質土器、須恵器片、土師器片などが大量に出土した（図版4）。また、この土坑11は



第12図 土坑11平・断面図



第13図 溝16平・断面図
面形は不定形状を呈し、埋土は1層で灰色シルト～細砂が堆積する。遺物は少量出土したが、図化できるものはなかった。

土坑77（図版4）

調査区の中央部南端の、 $X = -148,393$ 、 $Y = -37,641$ 付近で検出した。平面形は隅丸正方形状を呈し、南北1m、東西0.9mを測る。埋土は4層に分かれており、下から暗灰色粘土、暗灰色シルト～細砂、褐灰色シルト～細砂、暗褐灰色シルト～細砂（炭化物微量混入）である。遺物は少量出土したが、図化できるものはなかった。

溝46（第15図、図版4）

その西側で検出した土坑108に続く。

溝16（第13図、図版4）

調査区の中央部南端の、 $X = -148,391 \sim -148,395$ 、 $Y = -37,644$ 付近で検出した。調査区を南北に走り、北端は搅乱によって削平を受けており、南端は調査区外に伸びる。検出幅最小0.25m、最大0.6m、長さ4.47m、深さは最大0.08mを測る。

埋土は1層で、暗灰色砂質土である。埋土から瓦器片、瓦質土器片、須恵器片、土師器片などが大量に出土した。

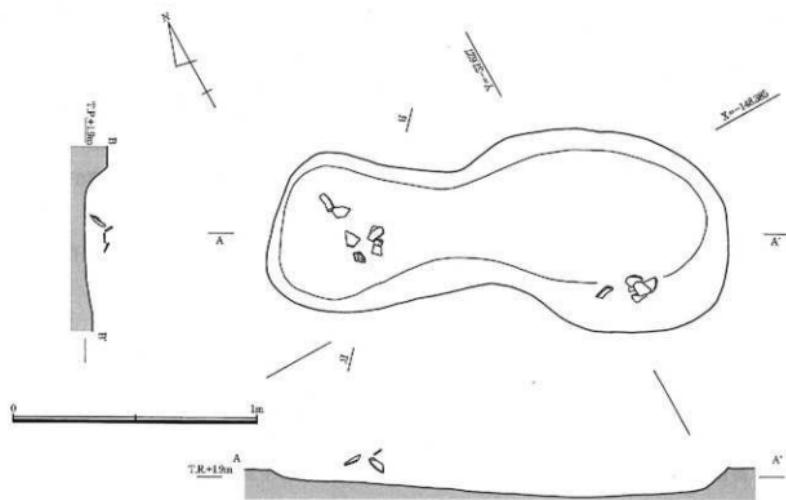
土坑56（図版4）、土坑114（第14図、図版4）土坑116

調査区の東端部中央よりやや南側の、 $X = -148,385$ 、 $Y = -37,630$ 付近で検出した。土坑56を掘削した段階で土坑114及び116を検出した。出土した遺物より、双方の土坑とも奈良時代の遺構と思われる。断面精査の結果、土坑114は土坑56を切り込んでおり、土坑116は土坑56に切られていることが判明した。

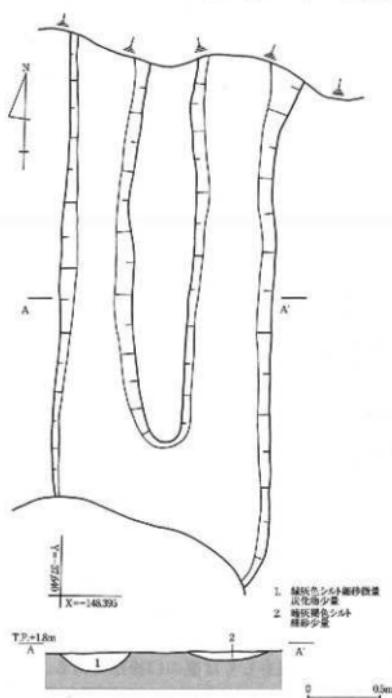
土坑56の平面形は不定形状を呈し、検出幅は南北最大4m最小1.5m、東西4mを測る。埋土は1層で、灰色シルト（細砂、マンガン粒が少量混入）である。遺物は少量出土したが図化できるものはなかった。土坑114の平面形は瓢箪形状を呈し、長径1.86m、短径は最大0.88m、最小はくびれ部分で0.45m、深度は0.2mを測る。埋土は2層に分かれており、上層は緑灰色シルト（細砂、マンガン粒少量混入）、下層は灰白色粗砂が堆積す

る。埋土から土師器、須恵器が出土した。土坑116の平

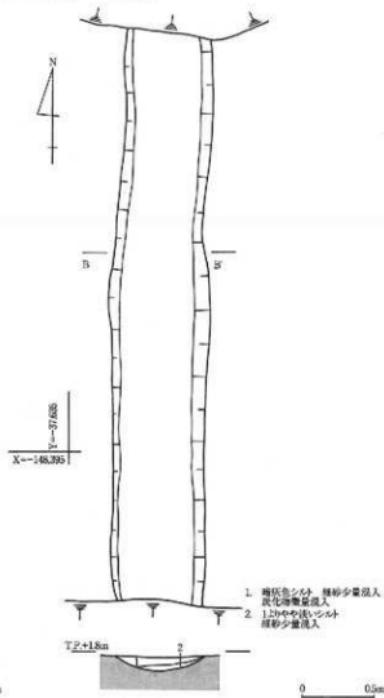
面形は不定形状を呈し、埋土は1層で灰色シルト～細砂が堆積する。遺物は少量出土したが、図化できるものはなかった。



第14図 土坑114遺物出土状況平・立面図



第15図 溝46-1・溝46-2平・断面図



第16図 溝51平・断面図

調査区の中央部やや東寄り南端部の、X = -148,391～X = -148,395、Y = -37,639～Y = -37,640付近で検出した。調査区を南北に走る溝で、東西幅1.5m、南北3.8m、深度0.13mを測る。北側1分の3は2条の溝に分かれる。そのため2条の溝の東側に溝46-1、西側に溝46-2という番号を与えた。溝46-1は東西幅0.65m、深度0.07m、溝46-2は東西幅0.6m、深度0.13mをそれぞれ測る。

埋土は溝46-1が暗灰褐色シルト（細砂少量）、溝46-2は緑灰色シルト（細砂微量、炭化物少量）のそれぞれ1層である。埋土から土師器、須恵器が出土した。

溝51（第16図、図版4）

調査区中央部東寄り南端部の、X = -148,392～X = -148,396、Y = -37,635付近で検出した。南北に走る溝で東西幅0.7m、南北4m、深度は0.1mを測る。北端は搅乱によって削平を受けしており、南端は調査区外に伸びてゆく。埋土は2層に分かれている、上層は暗灰色シルト（細砂少量、炭化物微量混入）、下層は上層よりやや淡いシルト（細砂少量混入）が堆積する。埋土から土師器が出土した。

溝109-1

調査区中央部東寄り南端部の、X = -148,391～X = -148,394、Y = -37,635～Y = -37,636付近で検出した。南北に走る溝で東西幅0.56m、南北は2.25m、深度は0.12mを測る。北は搅乱で削平を受けており、南端は土坑109-2に切られている。検出当初は溝109-1と土坑109-2はひとつの遺構として捕らえていたが、土坑109-2が浅い土坑と判明したので、溝を109-1、土坑を109-2と分割した。埋土は2層に分かれ、上層は暗緑灰色シルト～細砂（炭化物微量混入）、下層は暗灰色シルト～細砂（粘質強い、炭化物多く混入）が堆積する。遺物は少量出土したが、図化できるものはなかった。

第3項 遺構出土遺物

前掲のように、検出遺構は古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代～平安時代の主に2時期に分けることができる。それぞれ、検出した遺構内から出土した遺物を以下に報告する。

1 第2面検出の遺構出土遺物（第18図、図版5）

掘立柱建物跡1出土遺物（第18図1、2）

1は掘立柱建物跡1の柱穴から出土した須恵器杯Hの杯身である。口縁端部が欠損しているため口径は不明であるが、受部復元径は13.0cmを測る。外面全体に丁寧な回転ケズリが施される。TK43型式（注1）に属するものであろう。2は須恵器の壺もしくは甕の口縁部である。胎土・焼成がともに悪く、内外面は白色に近い淡灰褐色、断面は淡赤褐色を呈している。口径は14.4cmで、外面の肩部にはカキ目が施されている。

掘立柱建物跡2出土遺物（第18図3～5）

3～5は掘立柱建物跡2の柱穴から出土した。掘立柱建物1とはほぼ同時期のものであると考える。3は口径12.2cm、受部径14.1cmの須恵器杯Hの杯身である。外面全体に丁寧な回転ケズリが施され、立ち上がりの接合痕が内面及び受部に明瞭に残る。4は口径11.2cmで、内面に放射状暗文が施された9世紀末～10世紀初頭頃の黒色土器（内黒）碗である。後世の遺物が混入したものと思われる。5は内外面ともに横ナデで仕上げられた土師器杯である。口径13.8cm、器高3.1cmで、赤褐色～淡赤褐色を呈する。

溝127出土遺物（第18図6、7）

6・7は溝127から出土した遺物である。6は口径13.6cm、外面に指頭圧痕が残る瓦器碗である。上層の落込みの遺物が混入した可能性がある。7は復元最大径31.1cmとなる土釜の鍔である。胎土はやや粗いが焼成は堅致で、内外断面とも赤茶褐色を呈する。

溝77出土遺物（第18図8～10）

8～10は溝77から出土した。8はTK209型式に属する杯Hの杯身である。口縁端部を欠損するが立ち上がりが高く、内面と受部に立ち上がり接合の痕跡が明瞭に残る。残存する外面は全体に回転ケズリが施され、一部自然釉がかかる。受部の復元径は14.3cmである。9は土師器高杯の杯部である。口径11.4cmで底部の脚接合部から上に向かってナデが施されている。口縁部外面と内面には横ナデが施されている。10は復元最大径27.0cmの土釜の鍔である。体部との接合箇所で剥離しており、内面の調整は観察できない。胎土がやや粗く、長石、チャート、角閃石、酸化鉄などを多く含み、淡茶褐色を呈する。外面には一部ススが付着する。

土坑185出土遺物（第18図11）

11は土坑185から出土した口径は12.0cmの須恵器短頸壺の蓋である。外面は全域に亘って丁寧に回転ケズリが施され、一部淡オリーブ灰色の自然釉がかかる。口縁端部の外側に凹みのある面を有する。内面は回転ナデで仕上げられ、天井部と口縁部の境が明瞭である。

須恵器を中心に年代の比定を試みると、出土遺物はTK43型式～やや新しい時期、6世紀後半～7世紀初頭に製作されたものが大半を占める。一部、混入品と考えられる瓦器（6）や黒色土器（4）も出土しているが、上記の遺構はこの時代のものであると考えてよい。

2 第1面の遺構出土遺物（第18図、図版6、7）

土坑11出土遺物（第18図12～25）

12～25は土坑11から出土した。12・13はツマミを欠損した須恵器杯の蓋である。12は口径12.5cm、内外面ともに回転ナデで仕上げられ、口縁端部に返りがなく内側に屈曲し、外面にはほぼ垂直な面を有する。13は口径20.6cmとかなり大型である。天井の中心部が凹み、口縁部も大きく内側に屈曲する。内外面ともに回転ナデ仕上げが施されているが、口縁端部は特に強くナデられ、外

側の垂直面は中央が凹む。14・15は須恵器の杯身である。14は口径10.6cm、器高3.1cm、底径6.0cmである。内外面ともに回転ナデが施されているが、内面に円盤状の底部に体部が接合された痕跡、及び体部から口縁部にかけて帯状の粘土が接合された痕跡が残る。底部外面には、ヘラ切り後の調整が施されていない。15は底部に径8.8cmの貼り付け高台を有する。内外面ともに回転ナデが施され、高台が貼り付けられた後、接合部にはさらにナデが施されている。

16~21は土師器皿である。器面が風化し、残存状況はあまり良好でない。16は最も残存率が高く、口径12.8cm、器高2.8cm、底径9.6cmを測る。径口指数は21.9となり、外傾度も極めて低い。内外面ともに横ナデが施されている。底部から体部にかけての屈曲が明瞭で90度に近く、体部はやや内弯しながらほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部を強くつまんでナデしているため外側が屈曲して凹み、内側には面を有する。17は口径14.8cm、内外面ともに横ナデが施され、底部にやや丸みを持つ。体部はやや外傾して立ち上がるが、口縁端部でさらに外側に屈曲する。口縁端部は強くナデられ、端部内面には沈線状の凹みを有する。18は口径14.3cmで、共伴の土師器皿と比較して薄手で深い。内外面ともに横ナデ仕上げであるが、外面のナデが特に強く、口縁部でやや外弯する。口縁端部は外反した後、さらに内側に折り返されており、端部内面の面に凹みを有する。19は口径15.0cm、器高2.5cm、底径11.3cm、内外面ともに調整単位が明瞭な横ナデが施されている。口縁部で大きく外側に屈曲する。口縁端部内側にやや頬の広い面を有し、その中央には強くナデられた痕跡の凹みを持つ。20は口径16.7cm、器高2.8cm、底径13.9cmで平な底部を持つ。全体のプロポーションは16と類似し、体部がやや内弯しながらほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は外形し、端部の内側に沈線を有する面を持つ。同様に内外面とも横ナデが施されている。21は口径21.3cm、器高2.6cmの深い皿である。底部は平らに近く、体部が大きく外側に開いて立ち上がる。外側にやや屈曲するため、外面は窪み、内面は沈線状の凹みを有する面を持つ。

22は口径22.6cmの土師器皿である。体部は内弯し、口縁端部は丸みを帯びている。内面全体と口縁部外面は横ナデで仕上げられているが、体部外面には指頭圧痕が残る。

23~25は製塙土器である（注2）。23は口径10.0cmで、やや厚手の体部がわずかに内傾しながらもほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部は内側に垂直な面をもち、端部の下部はくぼむ。内面には、指でナデ消された痕跡は見えるが、口縁部、体部ともに布目が残る。外面には指頭圧痕が残る。胎土は大粒（最大4mm大）の土器が粉碎されたような細片（シャモット）や、長石やチャートを多く含み非常に粗いが、焼成は良好で淡茶褐色を呈する。奈良時代に山口県～九州地域で生産されたものであろう（注3）。24は口径13.3cmで、体部が口縁に向かってやや外傾している。器面は摩滅しているが、内外面ともに指頭圧痕が残り、内面には一部、細かい布目がタテ方向にナデ消された痕が見える。同様に胎土は非常に粗いが焼成は良好で、淡茶褐色を呈する。出土資料からは底部の形状は不明であるが、兵庫県西淡町に所在する谷町筋遺跡（注4）から出土し、F・G類に分類されている出土例に類似する。25は口径14.1cmで、体部がやや外弯しながら口縁部に向かって外に広がり、内側では厚みを増す。口縁端部は肥厚し、外面に明瞭な面を持ち、内面は

やや凹む。内外面ともに指頭圧痕が残るが、内面は横方向にナデられている。奈良時代に泉州地域で生産されたもので、広瀬と雄氏の分類（注5）において丸底三式、積山洋氏の分類（注6）において5類に属するものである。

溝16出土遺物（第18図26、27）

26は口径16.2cmで、須恵器の杯蓋である。内外面ともに回転ナデが施され、口縁部が外側に大きく屈曲する。口縁端部外面に、凹みを有するほぼ垂直な面を持つ。27は口径15.7cmの深い土師器皿である。外傾する口縁部は、口縁端部でわずかに肥厚し内側に折り返されるため、内面に沈線状の凹みを持つ。内外面ともに横ナデが施されている。

土坑114出土遺物（第18図28～30）

28～30は土坑114から出土した。28は径11.9cm、断面が台形状の貼り付け高台を持つ須恵器の杯身である。内外面ともに回転ナデが施され、高台が貼り付けられた後に、接合部にはさらにナデが施されている。29は、出土状況図（第14図）にも記録されている口径15.4cmの土師器碗である。体部は口縁部にかけてわずかに内弯し、口縁部は強い横ナデが施され、ほぼ垂直に立ち上がる。口縁端部はわずかに肥厚し、内側に丸みを帯びた面を持つ。30は口径16.2cmの土師器甕である。体部はほぼ垂直に立ち上がるが、口縁部で大きく外反する。口縁端部はわずかに内側に折り返されるため、内側に沈線状の凹みを持つ。体部外面は、6～7条/cmのハケ目が縱方向に施され、口縁部は横ナデで仕上げられている。内面は口縁部に粘土接合痕が残るが、全体的にナデが施されており、口縁部には一部水平方向のハケメが残る。接合はしないが、ハケメが施された同一個体の底部も出土している。

溝46出土遺物（第18図31～39）

31～39は溝46から出土した。31は口径12.2cmの薄手の須恵器杯である。内外面ともに回転ナデが施されているが、口縁部で強くナデられたためわずかに外反し、口縁端部は丸みを持つ。32は高台径が11.8cmの須恵器壺の底部である。内外面ともに回転ナデが施され、高台は貼り付けられている。高台の底面は内傾する。体部は弯曲せずにわずかに外傾しながら直線的に立ち上がる。33は同様に径13.1cmの高台を持つ壺の底部である。32同様に内外面ともに回転ナデが施された後に高台が貼り付けられているが、高台の底面は水平であり、底部から体部にかけて内弯しながら大きく開いて立ち上がる。34は口径18.1cmの鉢の口縁部である。内外面ともに回転ナデが施され、口縁がわずかに外弯して開く。口縁端部でやや内反し、上面に凹みを有する面を持つ。内面には沈線状の凹みを有する。

35は口径8.8cmの土師器小皿で、内外面ともに横ナデで仕上がられている。36は口径9.9cm、わずかに外反する口縁端部を持つ土師小皿である。内面全体、口縁部外面には横ナデが施されているが、体部外面には指頭圧痕が残る。37は口径15.4cm、38は口径18.7cmの土師器皿である。とともに、内外面に横ナデが施され、口縁端部がわずかに外反し、内側に面を有する。38は比較的厚手の体部で、口縁部がわずかに内弯し、丸みをもっている。39は口径12.0cmで、非常に薄い土師器杯で

ある。内面は横ナデで仕上げられスムーズであるが、外面には指頭圧痕が残る。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸みを持つ。

溝51出土遺物（第18図40～48）

40・41の須恵器、42～47の土師器、48の土釜が出土した。平安時代に比定できる遺物が多い。40は口径17.9cmの須恵器の杯蓋である。やや内弯し、屈曲しない口縁部を持つ。返りを持たない口縁端部は、厚みを増してわずかに内弯し、外側にはほぼ垂直な面を持つ。内外面ともに横ナデが施されている。41は口径18.9cmの須恵器広口壺である。内外面ともに横ナデが施され、口縁部は水平に近くなるほど大きく外反する。口縁端部は、強くなされたために凹みを有するほぼ垂直な面を持ち、内側に折り返される。口径11.8cmの土師器の小皿で、淡赤褐色の外面に一部ススが付着する。内外面ともに横ナデが施され、外傾する口縁部は屈曲せずに、丸みを帯びて内側に面を持つ口縁端部につながる。

42～46は、肥厚した口縁端部が内側に折り返され、内面に沈線状の凹みを有する土師器皿である。内外面はすべて横ナデで仕上げられている。43は口径12.1cmと非常に薄く、口縁部はわずかに外反し、底部は平らに近い。44は口径16.2cmで、厚手の口縁部がわずかに外反する。45は口径16.2cmで、共伴した他の土師器皿とは異なって、口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。46は口径19.9cm、比較的の薄手で浅い。47は口径21.7cmの土師器壺である。胎土がやや粗く、比較的厚手で、内外面ともに横ナデが施されている。わずかに内弯する体部は内傾し、頸部で大きく外反する。口縁端部で厚みを増し、上面にわずかに凹んだ面を持つ。48は最大径が25.5cmに復元できる土釜の鋤である。鋤と体部の接合箇所から剥離している。

本項で報告した出土遺物は、上記の通り奈良時代後半～長岡京期前後のものが中心である。須恵器の杯蓋や広口壺（41）や鉢（34）がKM131号窯（注7）など8世紀中頃～後半、長岡京前後の時期の資料に比定できると考える。土師器や土釜などの他の遺物も概ね同時期～9世紀頃のものと考えてよいであろう。製塩土器に関しては布目を有する特徴などから、奈良時代以降のものと見てよい。23は九州地域、25は泉州地域の製作技法の特徴を備えている。しかしながら、出土量が少ないと、また少ない出土量にもかかわらず複数の産地のものを含むことより、当該遺跡で製作・製塩されたのではなく、搬入されたものであると考える。

3 出土馬歯（第17図）

溝126の上層がやや窪地状になった場所から、馬歯が出土した。奈良時代後半の須恵器及び土師器と共に共伴しているため、同時代に埋没したものであろう。これは製塩土器の年代とも一致しており、同一遺構内からの出土ではないが、製塩土器は馬に伴うものと考える。

同定可能な残存状況であった馬歯は2点あり、それぞれ左下顎臼歯（P4）と左上顎臼歯であった。左下顎P4の歯冠高は66.8mmであった。しかしながら、年齢推定の指標とした久保・松

井1995（注8）による相関表に、P 4から年齢を推定する測定平均値のデータが存在しなかつたため、同表内における前後の歯（P 3及びM1）の測定平均値から求められる年齢より推定し、4才前後の馬のものであると考えておく。性別は資料が乏しく、同定することができなかつた。

（注1）田辺昭三 1966『陶邑古窯跡群』I

（注2）製塙土器の観察と产地同定については積山洋氏（大阪歴史博物館）のご教示を賜つた。

（注3）近藤義郎 編 1994『日本土器製塙研究』

（注4）兵庫県教育委員会 1990『谷町筋遺跡』淡路縱貫道関係埋蔵文化財調査報告書V 兵庫県文化財調査報告第73冊

（注5）大阪府教育委員会 1978『岬町遺跡群発掘調査概要一小島東遺跡・淡輪遺跡』大阪府文化財調査概要 1977

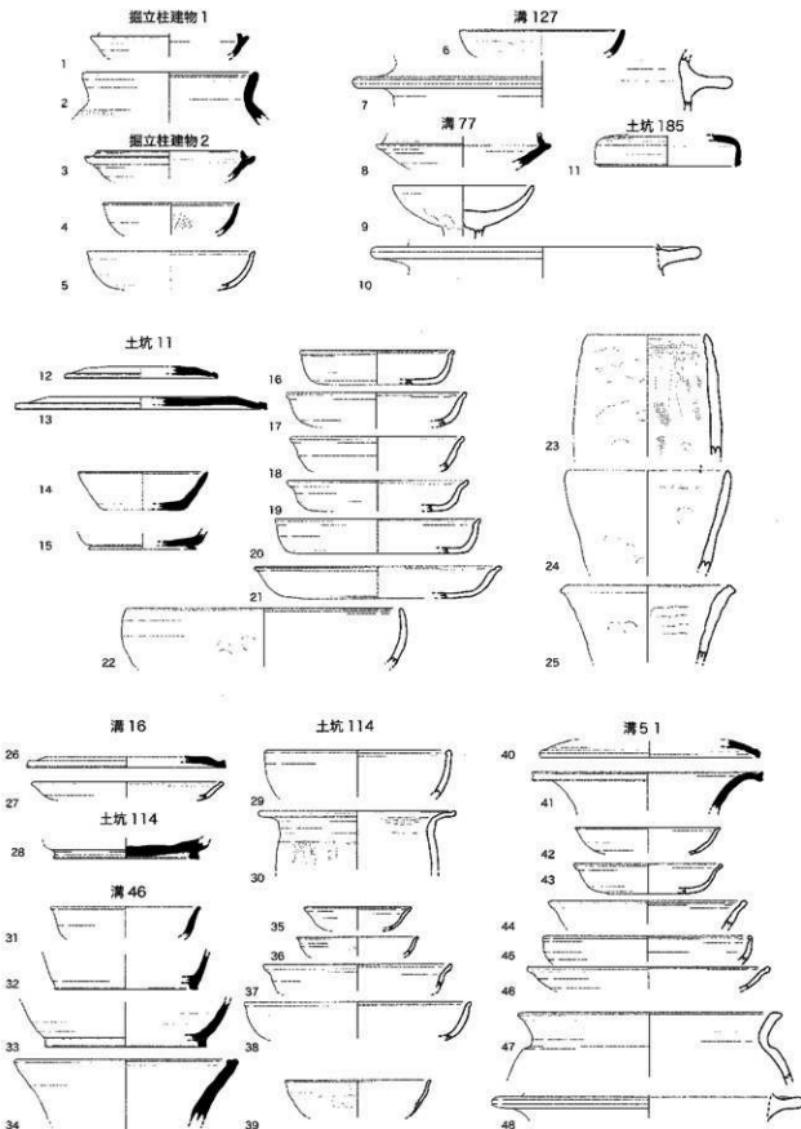
（注6）積山洋 1993「律令制期の製塙土器と塙の流通—揖河泉出土資料を中心に」『ヒストリア』141号 pp.69 - 92

注7）大阪府教育委員会 1995『泉州における遺跡の調査』I 陶邑Ⅶ 大阪府文化財調査報告書第46輯 近つ飛鳥博物館 2006『年代のものさし—陶邑の須恵器』

（注8）馬歯の測定、部位及び年齢同定は宮崎泰史（本府教育委員会）の指導のもとに行った。馬の年齢の推定は、久保和士・松井章（1999）によるウマの年齢と全歯高の相関表による。（西本豊弘・松井章 編 1999『考古学と自然科学② 考古学と動物学』同成社）



第17図 出土馬歯



第18図 出土遺物実測図 (S = 1 : 4)

号	登録番号	出土地点	種類	器形	時代	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	内面		外観		色・質・内面	断面	寸	文様等	
									外面	内面	底(天井)面	外側					
1	262	67 2区 P196	深腹器	舟形	TK43 (13.0)	—	(1.9)	円筒形	四脚ナメ	—	オホーブルナメ 舟形	灰灰	滑水灰色 舟形	滑水灰色	寸11	文	
2	232	68 2区 P196	深腹器	舟	占頂	(14.4)	—	(4.0)	円筒ナメ 4分目	四脚ナメ	—	滑水灰色	滑水灰色	滑水灰色	寸11	文	
3	314	69 2区 P196	深腹器	舟形	TK43 (12.2)	—	(2.3)	円筒ナメ	四脚ナメ	—	浅灰色	浅灰色	浅灰色	浅灰色	寸12	文	
4	325	68 2区 P167	黑色器	舟	古墳	(11.2)	—	(2.6)	横ナメ	横ナメ 舟形膨大	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸14	文	
5	324	69 2区 P166	土師器	舟形	古墳	(13.8)	—	(3.1)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸15	文	
6	304	70 2区 P122	深腹器	舟	中世	(13.6)	—	(2.1)	横ナメ 圓筒形	横ナメ	—	暗灰	暗灰	暗灰	暗灰	寸13	文
7	305	70 2区 P122	深腹器	舟	古墳	(12.2)	—	(2.8)	ナメ	ナメ	—	青褐色	青褐色	青褐色	青褐色	寸17	文
8	343	71 2区 P177	深腹器	舟形	古墳	(14.3)	—	(2.3)	直ナメ 舟形	直ナメ 舟形	—	滑水灰色	滑水灰色	滑水灰色	滑水灰色	寸28	文
9	336	71 2区 P177	舟形	古墳	(11.0)	—	(3.7)	横ナメ	横ナメ	—	滑水灰色	滑水灰色	滑水灰色	滑水灰色	寸29	文	
10	336	71 2区 P177	舟形	古墳	(12.0)	—	(2.8)	横ナメ	横ナメ	—	浅褐色	浅褐色	浅褐色	浅褐色	寸30	文	
11	327	65 2区 土師183	深腹器	舟形	古墳	(12.0)	—	(2.6)	四脚ナメ	四脚ナメ 舟形膨大	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸10	文
12	022	71 2区 P111	舟形	舟形	古代	(12.5)	—	(1.0)	直ナメ 舟形直腹	直ナメ 舟形	—	灰	灰	灰	灰	寸8	文
13	033	71 2区 P111	舟形	舟形	古代	(2.0)	—	(1.0)	直ナメ 舟形	直ナメ 舟形	—	明ホリゾンタル ヨコナメ	明ホリゾンタル ヨコナメ	明ホリゾンタル ヨコナメ	明ホリゾンタル ヨコナメ	寸59	文
14	033	71 2区 P111	舟形	舟形	古代	(10.9)	(6.9)	(3.1)	直ナメ	直ナメ	—	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	寸62	文
15	033	71 2区 P111	舟形	舟形	古代	—	(8.8)	(1.2)	直ナメ	直ナメ	—	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	寸61	文
16	035	71 2区 P111	舟形	舟	古	(12.8)	(9.6)	(2.8)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸53	文
17	022	71 2区 P111	舟形	舟	古	(14.8)	—	(2.8)	横ナメ	横ナメ	—	品字彫	品字彫	品字彫	品字彫	寸55	文
18	022	71 2区 P111	舟形	舟	古	(14.3)	—	(2.7)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸54	文
19	034	71 2区 P111	舟形	舟	古	(15.0)	(11.9)	(2.5)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸56	文
20	079	71 2区 土師11	土師器	舟	古	(16.7)	(13.9)	(2.9)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸57	文
21	033	71 2区 土師11	土師器	舟	古	(13.8)	—	(2.6)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸52	文
22	034	71 2区 土師11	土師器	舟	古	(13.8)	—	(2.6)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸52	文
23	033	71 2区 土師11	土師器	舟	古	(12.6)	—	(2.6)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸63	文
24	033	71 2区 土師11	土師器	舟	古	(13.3)	—	(2.1)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸64	文
25	036	71 2区 土師11	土師器	舟	古	(14.1)	—	(6.0)	直腹直底	直腹直底	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸63	文
26	039	71 2区 P116	深腹器	舟形	古代	(16.2)	—	(3.9)	直ナメ	直ナメ	—	灰	灰	灰	灰	寸32	文
27	039	71 2区 P116	深腹器	舟	古	(15.7)	—	(1.5)	横ナメ	横ナメ	—	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	寸33	文
28	268	72 2区 土師114	深腹器	舟形	古	(11.9)	(1.6)	(2.6)	直ナメ	直ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸36	文
29	234	72 2区 土師114	深腹器	舟形	古	(15.4)	—	(3.9)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸35	文
30	234	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(16.2)	—	(4.9)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸37	文
31	235	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(12.2)	—	(2.4)	直ナメ	直ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸7	文
32	236	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(11.8)	—	(1.8)	直ナメ	直ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸6	文
33	197	72 2区 土師114	深腹器	舟形	古	(13.1)	(3.7)	(2.7)	直ナメ	直ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸9	文
34	197	72 2区 土師114	深腹器	舟形	KM33 (18.1)	—	(5.0)	直ナメ	直ナメ	—	灰	灰	灰	灰	寸8	文	
35	197	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(8.1)	—	(1.9)	横ナメ	横ナメ	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	寸1	文
36	179	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(9.9)	—	(1.5)	横ナメ	横ナメ	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	寸5	文
37	179	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(15.4)	—	(2.1)	横ナメ	横ナメ	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	寸2	文
38	197	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(18.7)	—	(3.0)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸3	文
39	179	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(12.0)	—	(3.0)	直腹直底	直腹直底	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸4	文
40	199	72 2区 土師114	深腹器	舟形	古	(17.9)	—	(4.6)	直ナメ	直ナメ	—	病状灰	病状灰	病状灰	病状灰	寸26	文
41	199	72 2区 土師114	深腹器	舟形	古	(16.9)	—	(3.2)	直ナメ	直ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸25	文
42	199	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(11.8)	—	(2.1)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸18	文
43	199	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(12.1)	—	(2.4)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸19	文
44	199	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(16.2)	—	(2.1)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸21	文
45	199	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(17.1)	—	(2.1)	横ナメ	横ナメ	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	寸20	文
46	300	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(15.9)	—	(1.9)	横ナメ	横ナメ	—	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	寸22	文
47	300	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(21.7)	—	(5.5)	横ナメ	横ナメ	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	寸24	文
48	300	72 2区 土師114	深腹器	舟	古	(25.5)	—	(1.7)	横ナメ	横ナメ	—	赤褐色	赤褐色	赤褐色	赤褐色	寸31	文

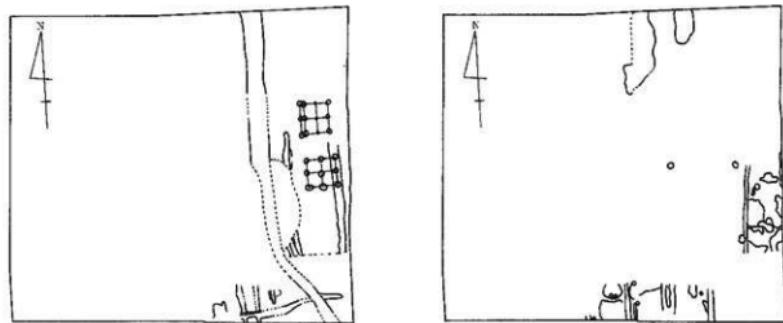
表3 出土遗物相容表

第4章 総括

調査の結果、当初の予想に反して、古墳時代後期～飛鳥時代と奈良時代～平安時代の計2面の遺構面が認められ、これらの遺構面から多くの遺構・遺物が検出される成果を得ることができた。

なかでも古墳時代後期～飛鳥時代の遺構面では、調査区東半の限られた範囲にではあるが、集落の西を限定する溝と、その内側にあたる東側に2棟が並立する状態で認められた掘立柱建物が検出された。検出されたのは集落のごく一部で、大部分は調査区東壁の外に存在すると考えられ、今回得られた知見のみで集落の性格等を推定することは困難ではあるが、今後の周辺の調査の成果が得られれば、これらの課題も克服できるものと考える。

奈良時代～平安時代の遺構面については、集落の存在を指摘できるまでの知見を得るには至らなかったが、当地および周辺は、これまで同時期の遺跡が認められないとされてきた地域であり、今回、遺構や遺物が確認されたことを契機として、周辺の調査成果でより具体的な様相が明らかになるものと考える。



第19図 遺構の変遷

図 版



図版 1



図版2

掘立柱建物跡2
全景（北より）



左 柱穴138
(南東より)



右 柱穴166
(北東より)



左 柱穴141
(北西より)



右 柱穴167
(北西より)



第2区第2面
全景（北より）



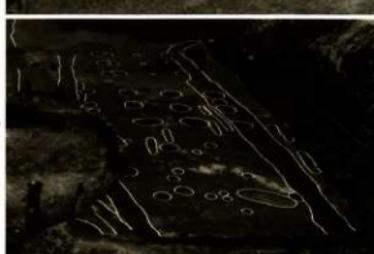
左 溝78、127
(北より)



右 溝126、177
(北より)



左 溝78、127
(南西より)



右 溝126、177 (南半)
(南東より)

左 土坑185
(南より)



右 土坑185
断面 (南より)

図版4

左 第2区第1面
全景（北より）



右 第1区第1面
全景（北より）



左 土坑11
全景（南より）



右 土坑11
遺物出土状況
(東より)

左 土坑114
(北より)

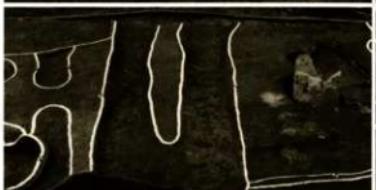


右 土坑77
(南より)

左 溝78、127
(南西より)

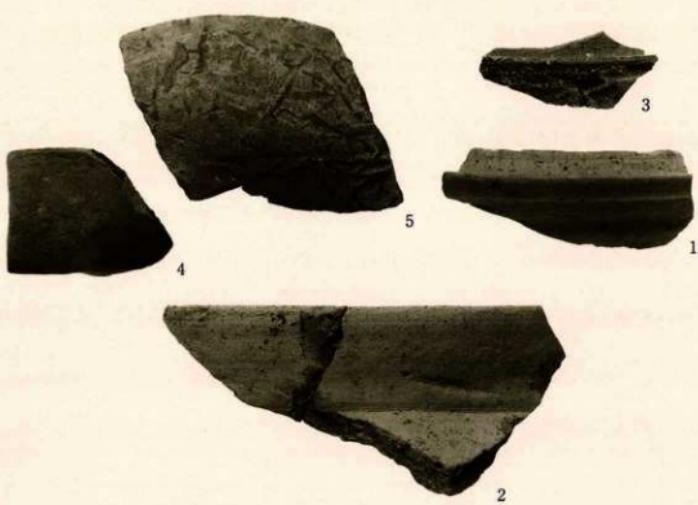


右 溝126、177（南半）
(南東より)



左 溝46
(南より)

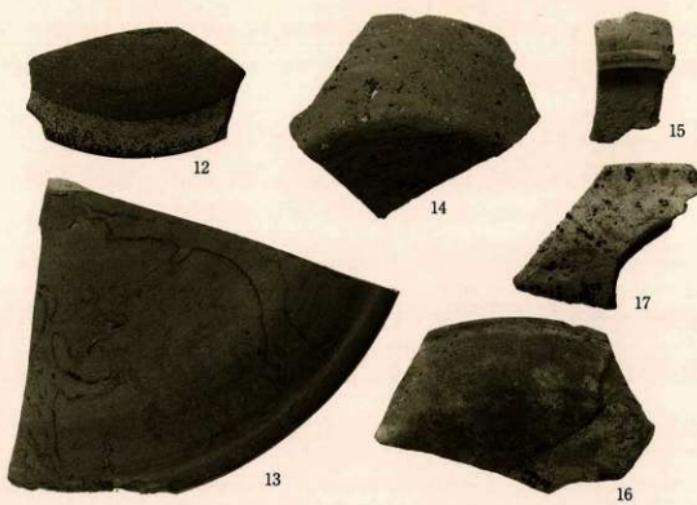
右 溝51
(南より)



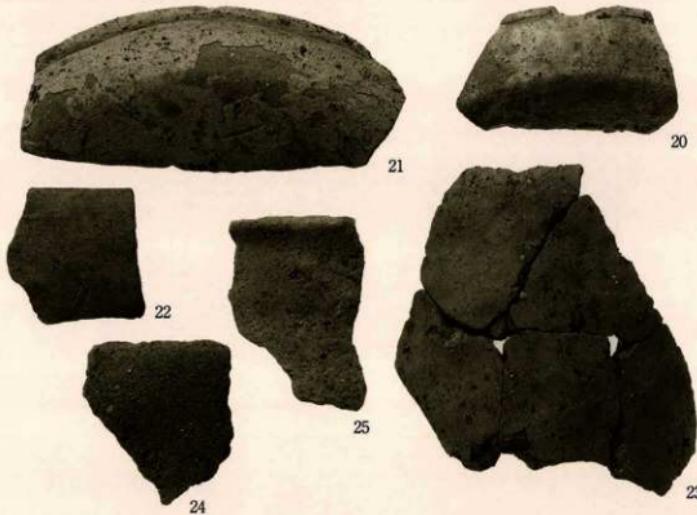
掘立柱建物跡 1 (1・2) 掘立柱建物跡 2 (3~5)



溝127 (6・7) 溝177 (8~10) 土坑185 (11)



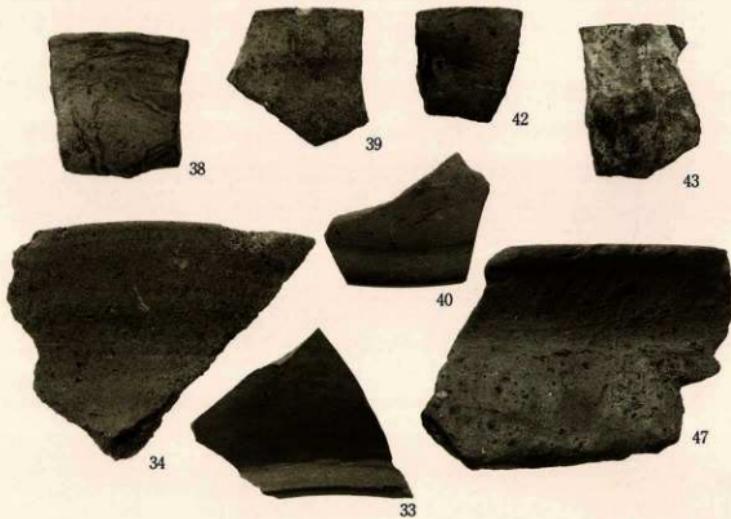
土坑11 (12~17)



土坑11 (20~25)



溝16 (26・27) 土坑114 (28~30)



溝46 (33・34・38・39) 溝51 (40・42・43・47)

報告書抄録

ふりがな	くれたけいせき							
書名	呉竹遺跡							
副書名	布施警察署庁舎建設に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2008-3							
編著者名	岩瀬 透・小川裕見子・藤井信之							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	平成21年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°°'	°°'			
くれたけいせき 呉竹遺跡	ひがしおおさか 東大阪 しらかさか 市下小阪	27227	177	34° 39' 30"	135° 35' 37"	平成19年5月28日 から平成19年12月 10日	1,487m ²	大阪府 警布施 警察署 庁舎建 設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
呉竹遺跡	集落跡	古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代	掘立柱建物跡、区画溝、溝、土坑	須恵器、土師器、など	古墳時代後期から飛鳥時代の、集落の西端を画する溝、倉庫と考えられる掘立柱建物2棟、奈良時代から平安時代の、溝、土坑など。
要 約	古墳時代後期から飛鳥時代に属する集落の西を限定する溝と掘立柱建物2棟が調査区の東端部で検出され、古墳時代後期の集落が存在し、集落が東へ広がっていることが判明した。東方に隣接する瓜生堂遺跡でも同時期の集落が検出されており、両者の関連が注目される。奈良時代から平安時代の遺構は南方および東方へ広がる様相を呈しているが、これまで付近で同時期の遺構がまとまって検出されたことはないが、今回新たな集落の一端を確認できた、今後の周辺の調査成果が注目される。				

大阪府埋蔵文化財調査報告 2008 - 3

呉竹遺跡

布施警察署庁舎建設に伴う発掘調査

発行日 平成 21 年 3 月 31 日

発 行 大阪府教育委員会

〒 540 - 8571

大阪市中央区大手前 2 丁目

TEL 06 - 6941 - 0351

印 刷 株式会社近畿印刷センター

〒 582 - 0001

柏原市本郷 5 丁目 6 番 25 号

Tel 072 - 920 - 3488 (代)

